



カナダ太平洋鉄道を実現した
初代首相マクドナルド

口が三九三万といわれる。アメリカがまだ東部十三州だけの時代である。一〇〇年後のカナダは、まず広大な国土を用意して、アメリカよりも少ない人間でそれを充実させる仕事にとりかかった。気宇壮大な事業であった。

カナダのおかれた歴史的條件、すなわちそのスペースに対する人口の比、国際環境、とくに大國アメリカが隣接する状況、ヨーロッパの吸引力、といったものを考えると、カナディアン・アイデンティティの達成に政府指導者の牽引力の大きくならざるを得なかったことが頷ける。他の人物のことは勉強不足で判らないし、ここで考えようとするマクドナルドにしても漸く関心が具体化して来たところである。が無謀を承知で、建国の父祖としてのマクドナルドの役割に触れてみたい。

カナダ建設の青写真

自治領達成後、初代首相となったマクドナルドは、個性ゆたかな人物だけに毀誉褒貶いちじるしいが、カナダ建国の祖の一人にうたわれるにふさわしい魅力的

な人物のようである。彼の施策の数々はその後のカナダの路線を決定したという点で、影響力の大きいものであった。中でも有名な「ナショナル・ポリシー」(一八七九年の保護関税)は、トロント大学のデイルス教授のように、自由貿易立国カナダを提唱する人々からは経済理論を無視し、ナショナルリズムのためにカナダ人の生活水準を犠牲にしたと厳しい批判を蒙るのであるが、マクドナルド自身はその採用の背後に、自給自足可能な、多様化した経済を国民的な規模の市場圏で支えるカナダ、という青写真をもっていた。当時の常識から云えば保護関税は歳入における欠損を埋めることを第一義とすべきであったが、彼はそれを一歩進めて、製造工業と農業を共に関税で保護し、カナダの国内市場を北西部や太平洋岸まで拡大することを期待した(公立古文書館蔵、マクドナルド自筆のメモによる)。

カナダ太平洋鉄道の建設は、彼にとつて青写真達成のための、ある意味では「ナショナル・ポリシー」よりも重要な支柱であった。マクドナルドが保護関税をカナダの「ナショナル・ポリシー」と思い定めたのは、大体一八七二年末から一八七二年初頭にかけてであると思われるが、カナダ太平洋鉄道の敷設についてはそれより早く、一八六九年十二月十日附のマクドナルドの手紙で触れられている。大陸横断鉄道の構想は、元よりコンフェデレーション以前から存在したのだが、この特別な時期にマクドナルドがカナダ太平洋鉄道の名に言及しなくてはならない理由があった。それは、一八六八年七月末ルバート法が成立し、オンタリオの西からプリティッシュ・コロンビアに至る広

大な北西部地方は、ハドソン湾会社からカナダ政府へ移譲されることに決定したが、この地域は、その頃南北戦争後、再度の膨脹主義的風潮の高まっていたアメリカで、とくにミネソタ州の人々が食指を動かしていた。現にアメリカは、一八六七年ロシアからアラスカを購入し、カナダを狭む形となっていたのである。このミネソタ人の支授を得たルイ・リエルが現ウイニペグでかつてのルバートランド地方の独立を宣言したのが、一八六九年十二月の初頭であったのである。一八八五年のカナダ太平洋鉄道完成に支払ったカナダ人の犠牲は大きなものであったが、この敷設の意義は、一にも二にも、目に見えない合衆国との国境を、目に見えるものとしたことにあると云うことが出来る。一八八五年のリエルの二度目の蜂起が、新設の鉄道による軍隊の輸送で完敗に終わったことは、その意味で象徴的であった。ピエール・バートンのカナダ太平洋鉄道建設の物語、『国家の夢』が成就されたと云えよう。

実践の連邦

同時代人リンカーンと比べると、マクドナルドには「ナショナル・ポリシー」があり、カナダ太平洋鉄道はあるが、隷解放宣言やゲティスバーグ演説がない。東大の本間教授の名著、『理念の共和国——アメリカ思想の潮流』のひそみにならえば、カナダは対照的と云える位、「実践の連邦」なのである。そして合衆国がアイデンティティの核に理念を据えて来たとするならば、カナダは実践を通してアイデンティティを達成して来たと云える。

その結果、カナダ史には独立宣言がなかった代りに、バンカー・ヒルの戦いも起こらなかったということになった。スカレット・オハラやアングル・トムのロマンティックな色彩を欠いたかもしれないが、南北戦争は戦かあれずに済んだということである。「革命」の名に値いするドラマの不在を残念がる人もいるかもしれないが、その代り反革命も生じなかったということである。リップセットに云わせれば、そもそもアメリカ革命に対する反革命の所産カナダではあるが、カナダがこれに対するに急進主義で応えたことは殆んど無かった。

カナダのアイデンティティは、実践と漸進主義をもって達成されて来たところに特徴があるように思われる。それは同時代を生きる者にとつていかに幸わせなことであつたらうか。カナダという国は、その種の幸わせを求めぬ人々が選び作った国、と云えるのではないだろうか。これからの国作りが、カナダの例を学べばと思うことしきりである。

この結果現在では、オタワで食卓を囲んだ十数人の人々が、国籍を問われてカナダ人、と答える場合、彼らは一九四八年にウインセント・マッセイが「ロンドン街頭にあつてイギリス人でもアメリカ人でも無い人々がカナダ人である」と書いた時より、はるかに積極性を伴ったカナダ人としての政治的、経済的アイデンティティを主張し得るようになったと思われる。問題は文化的アイデンティティの達成にある。文化的側面は外部に居ては中々判らないが、カナダの歴史的發展の中にそれを探ることを、私の今後の課題としたいと考えている。